

---

# なんか力オスな短編集

月食猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なんか力オスな短編集

### 【Zコード】

Z3331S

### 【作者名】

月食猫

### 【あらすじ】

長編が書けない作者の、ギャグありバトルありホロリあり？な短編を沢山綴つていきたいと思った所から出来ちゃった代物です。笑つてもらえたたらとても嬉しいです。

作者の趣味により残酷描写が入るかもしれません、多くの人に楽しんでいただけるように極力軽くするつもりです！！

更新は亀以下、自己満足でノリと勢いでやってしまっている上、内容は素人で誰か文才を…！…な作者ですが、楽しんでもらえたら嬉しいです。

## チキンがタカに変わる時？（前書き）

チキンな主人公が、何かをきっかけに変わったら？…と思いついて書いた物です。主にギャグのつもりです。

## チキンがタ力に変わる時？

隊長、何か命の危機です。隊長なんていないけど。

どうもこんにちは。傍観者気取りの一般人です。その実質はただのチキンです。ガラスのハートの持ち主なので取扱注意なのです。

それはともかく、現在ちょっとした命の危機に陥っています。アレです。立てこもり事件の人質になつてます。まあ、僕以外にも10人近く人質居るんですけどね。

「我々はまだ同志達を救いたい。しかしそれが受け入れられなかつたため、仕方なく貴様らには人質になつてもらひつ」

とか何とか犯人は何やら屁理屈こねてます。なんか、崇高な志の元に集つた仲間を解放しろ的な要求をしてます。ついでに完全武装です。爆弾のチラリズムなんて誰も望んでませんし、出来ればこれから先も出会いたくなかつたです。

その割には冷静だと思つてるそこのあなた。違います。これはただの現実逃避です。僕はチキンなのです。一般人よりも弱いハートの持ち主なのです。あ、何かお腹痛くなつてきた。

だつてアレですよ？逃げないようにして完全武装したいい年こいた大人が銃突き付けて脅すんですよ？要求通らなかつたら皆殺しにするつて言つてんですよ？遅くなつても見せしめで誰か殺されるかもしれないんですよ！？すみません取り乱しました。

ですが、これでも僕は高校生。ここには僕より年下の子だつてい

るんです。その子が、親にあやされてるとは言え泣くのを我慢しているのに、年上の僕がとりみだしたらカツコ悪いことこの上ないじゃないですか。幾らチキンでも、そんな醜態は見せたくないっていう意地があるんです。

ちなみに、立てこもり現場になつてるのは『amber』って言う喫茶店。マスターが僕のジイちゃんで、僕は手伝いをしてたんだ。……じいちゃんの夢の城が踏み荒らされてるかと思うと、正直はらわたが煮えくりかえる想いだけど、チキンで弱虫な僕は何もできない。と言つより、情けないことに怖くて体が動かないんだ。

じいちゃんは丁度買い出しに行つてていない。僕が店番してる最中に来たんだ。運がない。でも、僕はじいちゃんつ子だから少し安心してる。……けどやっぱ怖いモノは怖いんですけどね！！

外では警察と野次馬がわんさか。警察はともかく野次馬の方々には全力でこの場から消え去つて欲しい。そんなに人の不幸が楽しいですか？これは見世物じゃないんですよ？飛んできたマスクゴミの人間が、ニヤニヤと笑つているだろう野次馬の人達が、酷く醜い存在のようだ。なんて、結構ギリギリな僕が思い始めた頃、一番年下の子がとうとう泣き出しあしました。

その子をきっかけに、爆発した。理不尽だと叫ぶ高校生達に、子供だけは助けてほしいと頼む親子と、神様仏様に助けを祈るご老人。一気に騒がしくなつた店内は、一発の銃声であっけなく静まり返りました。

「騒がしい！！貴様等は人質である。貴様たちが生きているのは一重に我々の寛大なる心のお陰だと心得るが良い！！次は騒がしくした奴から撃つ」

理不尽です！！横暴です！！なんて心の声が飛び交った気がしましたが、誰ひとり口にはしませんでした。なにせ、相手はなかなか思い通りに行かなくてイラついているマトモじや無い人達。そして、誰も進んで死にたいとは思いませんから。

「バカかアンタ等。今言つた事つづ一か全体的に理不尽すぎて笑えるぞ」

誰ですかこんなギリギリな状況でそんな事言つたのは！！驚きですよ！？うつかり心臓止まりかけましたよ！？ついでに僕の隣にいた常連の幸田さん（70歳男性）が倒れちゃつたんですけど！！なんか心臓が止まつたような『ピー』って音が聞こえた気がしたんですけど！？

倒れちゃつた幸田さんを介抱しながら、うつかり突っ込んでしまつた僕。でも、そんな僕達を無視して、声の主と犯人さん達の会話が始まっています。

「貴様、我々を愚弄するのか！！」

「実際してんだよバカが。だいたいよお、こんなちつせえガキンんな物騒なもん付きつけてる時点でお前等の人間性が終わつてる事に気付けてんだこのタコ」

「なにい！！」

「年下のガキやら余生を楽しく過ごしてゐる『老人、幸せに暮らしてゐる家族。これ全部犠牲にしてまで救う価値があるのかよ。てか逮捕されたんだろ？いつたい何やつたのさ』

「我々は崇高なる志のため、悪に対し天誅を下しているのだ」

堂々と胸を張つて答えた… じさんを

「イコール人殺しじゃねーかバカヤロー」

とバツサリ切り捨てました。アレです。時代劇とかで『切り捨て御免』と言わんばかりの勢いでした。ちょっとどころじや無く胸がスカッとしました。

「貴様あ…！それ以上バカにする事は許さんぞ…！」

「おつと、そいつで俺を撃つのか？俺は構わねえけど、俺を撃つた瞬間…いいや、これ以上何かを傷つけた時が、お前の負けだ」

ビッククリするくらいの豪胆さで言つてのけたのは、良くカウンタ一席の端っこの方で眠そうにしてる不良っぽい人だった。でも、顔に似合わずとも優しい人だつて知つてます。だけど、こんなに頼もしい人だとは思いませんでした。

いつも眠そうな所しか知らないので、なんて言ひんでしょう。：  
覚醒状態の吾妻君を見るのは初めてです。でも、いつものチキンな僕だつたらガクブル状態になつてただろうけど、僕も何か極限状態？になつてるからそこら辺は大丈夫でした。

むしろ若干暴走した様です。吾妻君が着火してくれました。僕の何かに。

「そろそろお帰りいただけますか？ここは貴方方の様な薄っぺらい人間が十足で踏みにじつて言い様な場所じやないんですから」

「つかり滑り出てきた言葉は、思いの外冷たく響いた。

「大体、ここがどうこうところかご存知ですか？ああ、それも理解できないからこんな愚かなまねができるんですよそれはすみませんでした。いやあ、まさかい年こいた大人がこんな小さな子供にすら武器を向けるなんて素晴らしい脳みそをしていますねえ。しかも店内で発砲？いつそ「ゴキブリの脳みそと交換した方が良いんじやないですか？」

なんか、ふしきれちゃいました。今、自分でもかつてないほど良い笑顔浮かべて気がします。ただ、それを見た皆さんが顔を青くしているのには驚いてますけど。

「しばらくお待ちください」

大人しく警察に面首してつた、自称『世界の夜明け』（痛々しい事この上ないよね）のメンバー達。もちろん、吾妻君とタッグを組んで追い込みました精神的に。肉体的にやつたら色々とめんじくさいと言う、今まで培つてきたチキンの僕がいましたから。

その後、その様子を見てた幸田さん（途中から復活してました）が

「ヤクザと紳士の連係プレーが素晴らしいです。絶対に敵に回したくありませんが。ええ、絶対にです」

また高校生A曰く

「あれのどこがチキン！？思いつきり毒舌大魔王じゃん！…サディ  
スティック星の紳士じゃねーのあれ！！」

と言つていた事は余談。僕の知らない事です。

僕はこの事件をきっかけに、少し大きくなれた気がします。ええ、  
全ての基本は笑顔です。

## チキンがタ力に変わる時？（後書き）

後半グダグダになつてしまつました…。最後まで読んで下さりありがとうございました！！

11月6日、加筆修正しました。

## ある日の兄弟の会話文。（前書き）

とある兄弟の会話文的な何か。議題は『ヒーローのヒーローは居るのか』

## ある日の兄弟の会話文。

ある夜の事。仲の良い兄弟の弟の方が、とある疑問を兄に聞く事にしました。

「兄ちゃん」

「何だ？ 愚弟よ」

答えた兄は、やはり変人だった。しかしながら、これが兄の通常使用なのである。

「愚弟ゆーな愚兄が。…それはともかく、今ふと思つたんだけどさ

「なんだ？」

「ヒーローとか勇者つて人を守つたり助けたりするじやん？」

「それが勇者だのヒーローだと呼ばれる所以だからな」

「じゃあさ、勇者やヒーローは誰が護つてくれるの？」

「普通は仲間や友人、もしくは恩師とか恩人とかつて答えるんだろうな」

ここで『普通は』と出る所が実に兄らしい。なにせ、兄は俗に言う変人に分類されるからだ。

「じゃあ兄ちゃんはどう思つたの？」

「いないんじゃねーの？」

「んなアツサリ風味に言われても…」

弟のツツコミに反応したのかは定かではないが、兄は手にしていた本を置いて弟と向かい合つた。

「だつてよ、力があるから勇者とかヒーロー…つまりは主人公ポジションにいる訳だろ」

「そうだね」

「そして、大抵そう言う奴等の周りには、主人公たちより強いヤツは少ない。いたとしても、すぐに追い越される。力のピラミッドの頂点に君臨するものをどうやって護れってんだ?」

「それは…ない、かな?」

「その通り。それに程度の差はあるけど、主人公たちはいろんな意味で強い。精神的に弱つたり、怪我をして肉体的に弱つたりしても、仲間達がフォローする。でも、仲間達にとつて出来るのはフォローだけで、ヒーローのヒーローにはなれない」

「つまりはあれですか?仲間達はオマケ的な何かなんですか?」

「端的に言えばそうかもしけないな、我が弟よ」

ある意味ザッククリ言つてくれた兄に、弟は苦笑を浮かべながら見当違ひな所にツツコミを入れた。

「何キャラですかオーナーさん」

「オーナーさんはオーナーさんですよー」

「……どうでも良いから話を続けて下さいな」

「了解。……お飾りの主人公モドキは本物さんに陰ながら守られてるパターンが多い。恩師や恩人は一時的な救済もしくは心身ともに多大なる影響を与える、主人公の芯を創る。でも、その場合ある意味神と同列扱いになると思うから、いつでも駆けつけてはくれない。俺の独断と偏見では、ヒーローと波は常に人のピンチに駆け付けてくれる存在だからな」

「段々楽しくなってきたのか、饒舌になつていく兄。そして話は終わりへと近付く。

「つまりは例外はあるかもしれないけど、基本的には主人公を護る人はいないってことだよね」

「長い話の割にはなー。でも、ギリ相棒は背中を預ける的な意味で仲間より上かも」

「そつかー」

「でも結局のところ、そんな人間は稀だし、心配する事はないよ

「そう?」

「普通は自分の事で手一杯なのに、わざわざ他人まで守つてんだか

ら自分一人位楽勝だろー。

しかもあれだぞ？現実世界じゃそんな奴なんでもつとつへに絶滅危惧種認定もしくは皆無だろー」

「でもよく自分の身を顧みずつていうパターンがあるんだけど」

「そりゃあれだ。そこで死ぬよつなら主人公じゃねーだろーし、そつ言つうバカの周りには大抵ストッパーとか鬼の説教があるんじゃねじやねーの？」

「ふーん」

「それに、一次元の世界とまではいかないけど、世の中意外とどうにかなるもんや」

「だといーねー」

「だよなー。まあ、どうでも良いか」

「まあね。僕等は間違つても主人公にはなりえないし」

「そーそー。俺は自分を構成する物質達しか譲れませんからー」

「むしろ兄ちやんは勇者じゃなくて魔王サイドだろー」

「ふははははは」

「やめて無表情棒読みのそれは若干怖い」

「ううして、兄弟の時間は更けていくのであった。

## ある日の兄弟の会話文。（後書き）

何が書きたかったんだろう自分。でもこれ半分以上実話だつたり。  
一話目がこれとかでホントごめんなさい。スライディング土下座  
仕様です。でも楽しかったです。

## ある夫婦の話（前書き）

最近ギャグしかやってなかつたので、シリアルでネタ出しあります。更新が相変わらずカタツムリ以下です。楽しいかどうかはわからぬい自己満足でもよければ読んでください。やっぱ文才欲しいです。

side・小説家の妻

騒がしくなった病院のベッドの上で、私は君と今まであったことを振り返っていた。

私たちが初めて会ったとき、私は男勝りなじやじや馬で、君は本が好きな大人しい人で。普通だったら、接点なんてかけらもないようないい人だったね。

あの頃の私は、ともかく強く在りたくて。だから、女の子らしいこととか室内系のものは嫌いだったし、本なんか大嫌いだと言つて、男なのに本ばかり読んでる君に絡んでた。あんなの、ただのハッ当たりなのに、その時は私のほうが正しいんだって思い込んでた。

ある時、私が本が嫌いだつていつたあと、その時君が読んでた本を読みもしないのに馬鹿にしたことがあつたよね。でも、その時初めて君がまっすぐ私を見つめ返してくれたのを覚えてる。だつて、恥ずかしながらそれが恋に落ちた瞬間になつたから。

それまでは結構曖昧な笑ではぐらかされて相手にもされていなかつた。でも、その時君は、それは違うと言つて見つめ返してきたその瞳があまりにも真つ直ぐで。そして気づいた。私がこんなにも彼に絡んでたのは、無意識のうちに気になつてたから。本が嫌いだといつたのは、君が本ばかり見てるから。それが悔しかつたんだつて、その時初めて気づかされた。

そんな私の複雑な感情を知つてか知らずか（多分分かつてなかつたんじゃないかな）、それ以来私にいろんな物語を教えてくれるようになつた。勉強とか、あまり得意ではなかつた私でも読みやすいような簡単なものから、だんだんグレードアップしていつた。それ

でも本が嫌いだと言つていた私がそれらを読めたのは、きっと君のおかげだと思う。

君が勧めてくれた本を読んで、どこかがどんな風雨に面白かったか伝えたときの君の顔が、本当に嬉しそうに笑つて。感想を言い合ひながら笑いあえたあの時間がひどく優しくて。気がついたときには立派な活字中毒者になつてた。

そんな私たちは、周りには良く男女逆転夫婦のようだからかわれたりしたけど、それでバランスが取れていたんだからいいじゃない。

君が私にたくさんの物語を教えてくれて、私はそのお返しに君を太陽の下に引っ張り出した。二人して相手の笑顔を望んだ。卒業したあとも、なんやかんやと関係は続き（でも、実は告白もしてなかつた）、気がついたら結婚してないのに同棲までしてた。良くそれで結婚してないと驚かれてたつけ。

プロポーズは君からだつた。まあ、本当は私の方からしようと思つてて、夕飯の時にポロリと

「あたしから君にプロポーズしようと思つんだけど、指輪のサイズつていいくつ？」

つていつたら、ご飯吹き出すくらい驚いてたね。色々と大惨事だつたのに、君が必死になつて

「それは男としてちょっとどじろじやなく譲れないものがつ／＼／＼つて必死になつて説得しようとしてたから、思わず声を上げて笑つちゃつた。

次の日に、真っ赤なバラの花束を抱えて（半ば埋もれて見えた。後から聞いたら108本もあつたらしい）プロポーズしてくれた君は、バラと同じくらい真っ赤で。とても可愛かつたけど、それと同じくらいかつこよかつた。

物語を愛した君は、それと同じくらい物語に愛されていたね。君

は自分の趣味だからって私以外にはあまり見せようとしなかつたけど、欲目抜きに全て輝いて見えた。君が書いた物語は、それらすべてがいつも私の自慢で。実はこつそり家族や友達に見せてたの。ゴメンネ。でも好評だつたよ。君が綴る物語の数々の綺麗なことつたら…！正直、これが世の中で評価されなくて結構本氣で悔しかつた。

だからね、君が本当には小説家になりたかったって聞いたとき、私キした。だって、君がその夢を諦める理由の中に私がいたんだもの。

「こざとなつたら紫蘭君養うくらう簡単なんだから…！私が腹括つたんだから紫蘭君も覚悟決めて小説家になりなさい…！」

つて、盛大に吠えちゃつたわ。それで、君もやる気になつたみたいで、これでダメだつたらつて出したら、それが予想以上に売れて驚いてたつ。あつという間に人気作家に仲間入り出来たんだし、やつぱり才能あつたんだよ。

私だけの物語じやなくなつたのは少し残念な気もしなくはないけど、それ以上に君の物語がたくさんの人々に夢を与えてくれることが嬉しいの。…うれしかつたの。

でも、でもね。これは神様が君に与えた罰なんかじゃないよ。君は無力なんかじやなかつた。頼りなくなんてなかつた。だから、どうか自分を責めないで。これはね、私の自業自得なの。

買い物をした帰りに、ふらりと寄り道してたら交通事故に遭つた。しかも、どうやら打ちどころが悪かつたらしい。入院をして、表面上の怪我が治つてきているのにもかかわらず、私は衰弱していくばかりで。きっと、来年の桜を見るビンタが、これじゃあ雪を見ることすら怪しいかもしれない。

ほんと、物語のように思い通りにはならないものね。昔は君をい

じめる連中を蹴り飛ばして、つい最近まで職場を駆け回ったこの足が、今じゃもう感覚すらない。君の涙を拭いたいのに、手がまるで鉛で出来てるみたいに重くて、なかなか君に届かない。

それにして、ホント、ついてないわ。

小説家だから、仕事関係で死に目に逢えないなんてことにはならず、済んだって君は笑ってたのに、偶々着替えとかを取りに家に戻つた先で渋滞に巻き込まれて、後最低5時間は戻つてこれそうにいらっしゃいけど、「ゴメンね。ちょっとそれまで持ちそうにないっぽい。自分の体のタイムリミットは自分がよくわかるし、今お医者さんたちが動くのを諦めだしたんだもの。

side end

side・弟

袖をつかまれた。そして、伝言を頼まれた。…頼まれたくないかった。俺に伝言を頼んだその人は、俺の姉ちゃんだつたけど、酸素マスクをつけて点滴を受けてて。素人の俺でもわかるくらい、姉ちゃんは死期が近づいてるよう見えた。

「本当は、こんなこと姫ちゃんに頼んじゃいけないとは思つてるけど、お願い。これから言つことを、紫蘭君に伝えて欲しいの」

「ねえ、私は死んでも紫蘭君を愛してる。だから、忘れられるのはちょっとイヤ。でも、私が死んだあとに紫蘭君に好きな子ができるら、私を理由にしてその恋を諦めるようなことをしないで欲しいの。紫蘭君が、私が愛したあの人人が幸せだと笑顔になれる事が私の幸せだから。

「どうか、幸せに。それが、私の最後の願いです」

自分の口から言えよ。なんで俺がつて口から出そうだつたけど、

喉に引っかかって出てこなかつた。口を開いたら、さつと出でてくるのは言葉じゃなくて嗚咽になると思つたから。

それこそ、生まれた時からの付き合いで。年は離れてたけど、結構姉弟仲も良い方で。だから姉ちゃんの内側も外面も結構知つてつもりだつた。勿論、姉ちゃんも俺が生まれた時から俺のことを知つてゐる。だから、俺の心中もお見通しだと言わんばかりに苦笑された。

まるで、すがるように俺の袖を引っ張つたその手は微かに震えて。もうすぐ死ぬかもしれないってのに、その目は怖いくらいに真剣で。これから死んでしまうはずのこの人が、これほどまでに真剣な『アイ』をもつて揺るがないでいられたこの人を、不謹慎にも心底羨ましいと思つてしまつたから。

泣きそうなのを堪えている俺を慰めるかのように、ゆっくり撫でてくれたその手は相変わらず優しいのに、その細くなつてしまつた指が、冷たい手が、余計に俺の涙腺を刺激した。

そして、その直後だつた。姉ちゃんの手が滑り落ちたと思つたら、機械が異常を知らせてた。俺は慌ててナースコールを押したけど、なんとなくわかつてしまつていた。

姉ちゃんはもう、助からないのだと。

side end

side・小説家の妻

伝言を頼んだ。遺書は正式なのとそうでないのを書いた。君が一人になれないように、できる限り手を回した。

やだなー、死にたくないなー。というか、こんな時まで君のことばかりつてどんだけよ私。まあ、愛してるからなんだろうけど。

自分のことや家族のことより、君のことが気になつて仕方ない。大人しいくせに、たまにとんでもない無茶をする君のことだから、無理して怪我しなきやいいんだけど。

ああ、やたらとまぶたが重いし体は指ひとつ動かせない位重いのに、どこか軽い気がする。ついでに、すゞく眠い。竜ちゃんとか、お医者さんとかが呼ぶ声が聞こえる。竜ちゃんは泣いてるみたい。せめて、最後の息に乗せた言葉が、届けばいいな。なんて、望みすぎかな？

「すき」

ピ―――。

最後に何か、聞こえた気がした。

side end

それはきっと、奇跡でした。

竜君から華凜が危ないと連絡が来た直後、ちょっと無茶をして、全速力で走つて。5時間はかかるだろうと言われたけど、2時間半位に縮めた。だけど、間に合わなかつた。

いつも笑顔で僕を迎えてくれた君の顔に白い布がかかつてて。でも、その意味を理解したくなくて。走つてきたから汗びっしょりで体中湯気が出そうなくらい暑いのに、指先はひどく冷えてた。だけ

side : 小説家

ど、触れた君の手の方がもつとずっと冷たくて。僕の体温を移そうにも、まるで拒絶するかのようなその温度が、まるで僕を侵食していくかのように田代の前の現実を突きつけてきた。

あまりにも悲しそうで、僕の心が裂けてしまった。

きっと、どこかで信じた。キミが死ぬはずがないって。でも、キミは死んで、僕は間に合わなかつた。いつそのこと、キミのこの冷たさで凍死したいと思つた。

不思議と涙がでてこなかつた。涙が頭が心が凍りついてしまったのかもしれない。そんなことをぼんやり考えながら、僕はただただ華凛の手を握つたまま立ち尽くしていた。

どれほどそうした居たのだろうか。気がつくと、君の担当医と竜君がいることに気がついた。担当医からは、淡々とキミの最後を伝えられた。泣きはらして真っ赤な目をした竜君からも。

「最後まで、強い方でした」

「伝言を、頼まれた」

「アンタを愛し続けるつて」「アンタといて幸せだったつて」「忘れられるのはイヤだつて」「幸せになつて欲しいつて」

「姉ちゃんは、最後の最後までアンタの幸せを願つて、アンタを愛してた」

あまりにも哀しそぎて、気がついたら熱い何かが頬を濡らしていく。気がついてしまつたあとは、なじ崩しにボロボロボロボロ涙が溢れた。歯を食いしばつても、嗚咽が漏れ出した。

担当医と竜君が気を利かせて君と一人きりにしてくれたようだつたけど、それに気づく余裕なんてなくて。

僕はただただ、溢れるナーナに身を任せて、叫んで泣いた。

気が付くと、竜君と一緒に家に帰っていた。君もようやく帰つてこれた。けれど、ただいまを言う人は居なかつた。お帰りを言つてくれる人もいなかつた。

もともと、竜君が生まれてしばらくしてお義母さんは亡くなつて、お義父さんもキミが卒業する直前に死んでた。僕の両親とは別居しているため、いつもおかえりと僕らを迎えてくれるのは、華凜、君だつた。

竜君も、僕も、何も言わずに仏間にいる君のところに座り込んでいた。ポツリポツリと君の思い出を語らいつつも、言葉と同じくらい涙も溢れた。

そんな時、チャイムが鳴つた。華凜の死を聞きつけてやつてきた友達だと思つたため、僕が玄関に向かつた。予想通り、高校時代からの友人の斎川夫婦だつた。なぜか、ラブラドールレトリバーの子犬と、キャリーバック、それから犬用猫用のペット用品とエサを持って来ていた。

「華凜ちゃんから、最後のプレゼント、預かつてきた」

「犬の方はカラん、ラブラドールレトリバーで四ヶ月半くらいでトイレのしつけも済ませてある。こつちは猫のローダ。見てのとおり虎猫で以下略。ちゃんと渡したからな」

彼らはそれだけ言つてさつさと仏間にに行つてしまつた。玄関には大量のペット用品とカラんと紹介された子犬だけ。どうやら猫の方

は竜君らしい。

訳が分からず呆然としていた僕は、下から聞こえる切なげな声を聞いて少し我を取り戻した。最出した僕の手を、カラーンは遠慮がちに匂いを嗅いだと、甘えるようにペロリと舐めた。そして、怯えさせないようじゅつじゅつになると、気持ちよさをついに目を細めて体を押し付けた。

カラーンの体は、暖かかった。生きている温かさが、いつの間にか冷えていた僕の体をじわりと温めてくれて。僕はカラーンを抱きしめたまま、また少し泣いた。カラーンはしつぽを振りながら、静かに僕の涙をペロリと舐めた。

しばらくして、カラーンの首輪に小さな手紙を見つけた。それは、君からだった。

『紫蘭君と竜ちゃんへ

私はもう体が動きそうにないので、カラーンに紫蘭君を太陽の下に引っ張り出す役割をバトンタッチします。竜ちゃんはローダくんに振り回されてもらいます。私はきっともう一人の涙を拭いに行けないから、この子達に拭ってもらつてね。

私たちには子供ができなかつたけど、この子達を子供だと思つて、大切にしてあげてください。

この子達も、紫蘭君や竜ちゃんより先に天国に行くけど、すぐじやないから。皆で笑つてハッピーホンドになるような土産話沢山持つて、よぼよぼのお祖父さんになるまでこっち来ちゃダメだよ。

ちゃんと待つてゐから、急がずゆっくり、幸せを感じて生きてください。

華凜より

いつの間にか斎川夫婦は帰つていた。僕がカラーンを連れて仏間に

行くと、僕と同じように泣きはらしつつもしっかりと子猫を抱える竜君がいた。ローダ君は大人しく竜君に抱きしめられたまま、小さく鳴いて挨拶をしてくれた。なでるとやつぱり暖かくてふわふわしてた。

ねえ、華凛。この子達を僕らの新しい家族にするって決めたのはいつだつたの？聞きたいけど、もう君の声は僕に答えてくれない。それがまた、堪らなく悲しかつた。

もし、叶うなら。君と、竜君と、僕の三人でこの子達の名前を決めたかつた。

side end

『私はね、いつも紫蘭君に恋してる。自分の意思を伝える時のあるまつすぐな瞳に宿った光とか、照れたようににはにかむ顔とかベンだことか色々ある私より大きな手のひらとか、しおりちゅう寝癖まみれになつてるサラサラの髪の毛とか、もうとにかくたくさん！！ふとした瞬間に、ああ、私紫蘭君のこと好きだなー、って思うんだ。なにげない動作のはずなのに、なぜか紫蘭君にだけキュンキュンと心の危険信号が鳴るの。これ以上は心臓に多大な負担が掛かります！！てね。だって、心がキューってなつて顔が真つ赤になつて心臓がバクバクして頭がパンクしてとろけそう。物語の中の恋する少女達の気持ちがよくわかつた気がするわ。

あと、背中とか。特に、物語と向き合つてる時の背中が好き。その背中に寄りかかつてまどろむのが好き。君のキーボードを叩く音を聞いてると、不思議と幸せな気分になつてくるの。なんとか分からぬけど、君の背中は無条件に私を許してくれるような気がする。ご飯を作つてる最中にちらりと見える背中は、まるで旅立つているみたいに見えたりもするけど、ちゃんと帰つてきてくれるつて

知つてるから、その背中を見送るのも嫌いじゃない。

でも一番好きなのは腕の中。ぎゅってされると包み込まれた感じがして、とても安心できる。心臓バクバク言つてるけどね。二人でギュッてし合つてるのも、竜ちゃんを挟んでやるのも好き。

多分これを紫蘭君が読んでるって事は、私はもう死んでるんだと思う。つまり、私が送られる側になつてしまつたつて訳だよね。でもね、私は生き続けるよ。みんなの心や記憶の中とか、紫蘭君の書く物語の中に。みんなの中に、きっと私のかけらはあると思うから。

最後に、送られる私から残される君へ

貴方は私の最愛です。きっと、これから先もずっと。そして、君のこれから的人生に精一杯の祝福を』

『説家の妻』の最後のラブレターより

by『小

ある作家が新作を出した。『カナシ』と名付けられたその物語は、作家とその妻の実録に、ほんの少し手を加えただけだという。

その作家は、一年前に最愛の妻を亡くしていた。初版の発売日がその妻の誕生日だったということもあり、手に取るものは多かつた。なかには、からかいや冷やかしの気持ちをもつていたものも少なくないだろう。

その物語は、クチコミや書店員の手描きのポップなどにより、爆発的に広がつていった。

二人を分かつ悲劇が悲しかつた。相手を想い合う気持ちが哀しかつた。一人や周りの人の愛が愛しかつた。悲し、哀し、愛し。読ん

だ人は口々にそう言った。

「ある日のこと。彼は、『一番泣けた本』の作者としてインタビューされることになった。

「僕は、間にあいませんでした。だから、間に合わせてあげたかったんです。せめて、最後に彼女の名前を届けたかった。最後に愛を伝えたかったから」

「奥様のこと、とても深く愛してらしたのですね」

「ちょっと違います」

「？違う、とは？」

「彼女は今でも僕の最愛のままです。今でもまだ、愛しているんです」

そう言つた彼は、擦り寄つてきた家族の頭を優しく撫でていた。

## ある夫婦の話（後書き）

思つてよろしく。丁寧ではログアウト。とりあえず死ねで泣ける話が書きたかったけど残念仕様。でも書きたかった面白満足。ここまで読んでくださいありがとうございました。

## シリアルもん（ただしハピエン）（前書き）

前回に引き続き自己満足低クオリティ。いまいちシリアルもん（シリアルもん）になりきれない感じを田舎してみた。そして何か吹っ切れてきたかもしない今日この雰囲。

黙文で良ければどうぞ。

## シリアルもひき（ただしハピエンド）

突然突き飛ばされたのと、ついでさっきまで俺がいた所から嫌な音がしたのは、ほぼ同時だったと思つ。背中に何か温かなモノを感じて、何故かとても振り返りたくなかったけど、振り向かなければいけないような気がした。

そして、見えたのは。さつきまで一緒にいた悠の、血塗れの姿。ヤツは俺を見て笑つた。

「無事……で……よ……かつ……た」

凄くうれしそうに笑つて、俺の方に手を伸ばした。慌ててとつたヤツの手は、段々と冷たくなつていく気がして。救急車を呼ぶ声や、悲鳴がそこりじゅうからしてハズなのに、何も聞こえなかつた。世界の音が消えたみたいに感じた。その中で、だんだん悠の息が小さくなつてくると、自分の心臓の音がやけにはつきり聞こえていた。道路上に広がる赫と比例するように、どんどん悠が冷たくなつてくる気がして、手をずっと握つてた。どつかいかないうように悠の名前を呼び続けた。握つた手から力が抜けてだらりとした時、芯まで冷えて、何か鱗が入つたような音がした気がした。

そして、俺は悠の手を握つたまま救急車に乗つて。必死で呼びかけて。気がついたら手術室の前で悠の両親と俺の親父と一緒につて座つてた。全ての時間が曖昧だつた。まるで一瞬の出来事の様な気がした。でも、結構ゆっくりだつた様な気もある。

世界の全てが、まるで壁一枚隔てたかのように曖昧だつた。悠の両親が泣いているのも、親父が休めと言つているのも。俺が未だに血塗れだつてことも。全てどうでもよくて。ただ、壁一枚向こうにいる悠の事だけが、俺をつなぎとめていた。

「一命は取り留めました。しかし、いつ目が覚めるかは彼の生命力次第です」

その言葉が、俺の頭を覚醒させた。悠が助かつて嬉しいと思う心と、生命力次第って投げやりだろお前つていう怒りの感情。ともかく「ちやごちやしてたけど、手術室から出てきた悠は、あの時よりの少し顔色が良くなつているような気がした。それだけでも、酷く安心した。その後の事は覚えてない。親父曰く、確認して気が抜けたと言わんばかりにぶつ倒れたらしい。

あれから一ヶ月。毎日時間の許す限り、俺は悠に会いに来ているけど未だに悠は目覚めない。毎日、学校であつた些細な話をする。楽しい話。けど、いつもそれを聞いて腹を抱えて笑つてくれるお前が反応しないなら、楽しさマイナスだぞこのヤロー。

悠を轢いたのは、トラック。原因は携帯していた事に寄るよそ見。悠が思いつきり俺を突き飛ばしたのか、悠が吹つ飛んできた位置と大して変わらない所にいた。トラックの運転手は逃げようとしたけど、何人かの善良な人に寄つて止められた。ちなみに俺は思いつきり殴つた。でも悠のお母さんが凄かつた。平手で人が吹つ飛ぶのを初めて見た。

毎日、お前の目が覚める事を祈つて。でも、実際は会えないお前に絶望して。今日もきっと目覚めてないだろうなーと思つてた。どこの眠り姫だお前は。王子のチューで目が覚めるんですかでもお前男だから姫さんのチューか。まあいい。早く目覚まさないとまたアホなことやらかしちゃうかもよ?俺。

「…えと、おはよう?」

前言撤回。チューは必要なかつた。悠は目覚めた。

「今は夕方だからこんにちにわだろ。…寝すぎだぞアホ」

「あはは、『メンね？うつかり体が動いちゃった

「危なくなつたら俺を盾にするとか言つてたくせ、何言つてんだよ」

「うん。『メンね

どうか、気付かないでほしい。そつきから俯いて動けなくなつて  
いる俺の声が震えている事に。俺の目から水が出ている事に。こん  
な俺情けなくて見せられねえ。ああ、もうグチャグチャだ。でも、  
これだけはわかる。自信をもつて言える。

「また会えて良かつた……！」

縋りつく様に抱きついた。これでヤツに俺の顔は分かるまいフハ  
ハハハ。前より少しやせた体は包帯やギプスでいっぱい。でも、  
今俺の腕の中にいる悠はちゃんと暖かくて、心臓も力強く脈を打つ  
ていた。酷く、安心した。この温もりが消えなかつた事に。

チクショウ頭をなでんじゃねえよガキじゃねえんだぞつてか断じ  
て俺は泣いてない目から垂れ流してるのはただの塩水だ心配せん  
じやねえよお前どんな眠り姫気取りだよ。

そういうのに、出でるのは嗚咽としゃくりばかりで。し  
ばらく俺は顔を上げられそうにありません。いつだってこいつは俺  
の上を行くから嫌いだ。確かにお前には毎日会つてた。でも、『お  
前自身』には会えなかつた。凄く、凄く会いたかつたんだぞこのヤ  
ロー。

抱きついてるから、悠が俺の顔を見る事が出来ない。同時に、俺  
も悠の顔が見れない。それは残念だ。こいつの笑顔が見たかつたん  
だからな。けどもうちょっと待つてて。

「帰つてくるのが遅すぎんだよバカ……。1ヶ月、待たせすぎだ

「はは、ちやんと待つてくれてたんだろ？」

「俺は某忠犬じやねえんだぞ」

「僕はちやんと帰つてくるよ。君が待つてくれる限りは

「はは、すっげえ告られた気分。女の子にも告られてないのー」「軽口をたたきながら、やつとお互いの顔をまともに見た。いつもさりげない毒舌を吐く悠も、俺と同じ位泣いてた。けど、結構レアな、こっちの胸まであつたかくなる笑顔を浮かべてる。そう。これが見たかった。ようやく見れた。

「君、顔中汁だらけだよ？僕の服についたらどうしてくれるの？」「文句を言いながらも肩を貸してくれるから、遠慮なく汁まみれにする。昔は俺がやられてたんだから思い知るが良いフハハハハ。この汁の原因はお前です。悠のあつたかさが、俺の中の凍りついてた何かを融かしてるから。現在解凍中。ようやく俺も笑えるよ。

俺はきっと、握っていた悠の手から力がぬけてだらりとしたあの瞬間を、失うかもしれないという恐怖に押しつぶされたあの瞬間の冷たさを忘れる事はできないと思つ。でも、それと同じかそれ以上に、悠と『逢えた』あの時のぬくもりを、再び笑い会える日が来た幸せを忘れる事もないと思つ。

これから、悠はリハビリとか色々あるし、それ以外にも沢山辛いこともあると思う。けど、俺はこの一つと悠がいれば、意外となんとかなるような気がした。

「とこりうどん」「なんだよ」「言ひ忘れてたんだけど」「何を」「その、ただいま」「おかげり、悠。一体この一ヶ月どこまで行つてたんだよお前は」「三途の川つぽことこりうどひいじーちゃんひいばーちゃんその他諸々とエンカウント&バトル」「ほんと向してきたのお前えーーー」

## シリアルもじき（ただしハピエン）（後書き）

ハッピーホンド主義者。だから最後にギャグ投入して空氣を壊してみた。そしていつもの残念クオリティ。にもかかわらずここまで読んでくれた人ほんとにありがとうございました。

## ひとつあるべき正座な（前書き）

何か吹っ切れたようです。駄文でよろしければ笑ひなが。

## とりあえず正座な

その日、彼等はいつものように楽しんでいた。ある者は怪しげな実験薬を作り、ある者は筋トレという名の破壊活動に勤しみ、ある者は「締め切りのドアホー！！！」と叫びながら執筆活動に勤しんでいたりする。その他にもいかにもフリーダムといった様子である。しかし、ここは勉学に励む場所、学校である。さらに言えば、本來なら授業中のはずの時間帯である。しかし、先生は誰もこの教室に足を踏み入れようとしない。以前、些細な事で彼らから総攻撃をくらい病院送りになつた教師が何人もいたからだ。

「魔王クラス」と悪名高いこのクラスの唯一の良心であり、一番の苦労人である如月紅牙は、そろそろ自分の限界が近づいていることに気付いていた。彼はいつも、自分の気付いた範囲でクラスメイト達の暴走を止め、被害にあつた人達に頭を下げたり騒ぎの後始末をしたりと走り回る日々。

クラスメイトが怖くて何も言えない教師や他の生徒達は、常に紅牙に文句を言つたり注意をするように言つてくる。そしてクラスメイト達も紅牙に止められるたびに不平不満を漏らす。実はこつそり保健室と胃薬のお世話になりつつある。むしろ胃薬が親友状態だ。戦意喪失して怯えるくせに、自分より弱いと思っている相手には自分を優位に見せようとする醜い大人。怖い危険だといいつつも野次馬根性丸出しにした揚句、結局巻き込まれて文句を言う生徒達。そして自分のやりたいこと優先で周りに及ぼす被害について無頓着なクラスメート達。

そもそも俺はキレイでも良いんじゃないか。むしろなんで俺は今までキレイなかつたんだ。

ふと浮かんだその考えは、消し去るにはあまりにも大きな問題だった。第一、問題児を総動員したクラスに何故、ごく普通の学生やつてた俺が入ってるんだろうか。何故自分があのアホどもの尻拭いに貴重な青春を消費しているんだろうか。紅牙がそう悩んでいる最中も、その思考をまとめさせたくないと言わんばかりに、いつものようにフリーダムに振る舞うクラスメイト達。

「あ、ヤベ……間違えた」  
怪しそうな謎の物体を作り出す奴。しかも絶対アウトライン超えてる。

「あいたく  
校舎弱すぎたぞ」  
自分のミスで校舎を破壊しているのにもかかわらず、校舎のせい  
にするアホ。

その時、紅牙の近くにいた比較的おとなしいクラスメイトは、確かに何かが勢い良くちぎれる音を耳にしたと言う。そして、それはおそらく紅牙のものすべく太く長かつた堪忍袋の縫が切れた音だったのかもしれないとも。

そして彼は唐突に椅子を蹴飛ばすどころか蹴り破らんばかりの勢いで立ち上がり、真剣持つて来たと自慢していたクラスメイトを手刀の一撃で沈めた後、彼が持つてきていた真剣を奪い取った。ちなみに、10秒にも満たない間での出来事だった。

「もう、我慢の限界です」

そう言つて、無表情のまま真剣を慣れた手つきでスラリと抜き、その切つ先をクラスメイトに向けた。言つておくが、彼は剣道もしくは武術を習つた事はなく、強いて言つなら体育の授業くらいしかない。しかし、その動作は何故か洗練されており、とても恐ろしかつたと言つ。

それまで馬鹿騒ぎを繰り広げていたクラスメイト達は、彼のその行動に凍りついた様に動きを止めた。普段の彼もしくは他の誰かがやつたのであれば、ただのジョークだと受け取られただろうが、今この紅牙は危険なオーラが溢れていた。

どの位危険かというと、丁度彼の近くを飛んでいた紙飛行機がいつの間にか両断されていたりとか、その巻き添えのように机どころか床まで柔らかいバターの様に切れたりとか、ずっと見ていたはずなのに誰ひとりその動きどころか音すらわからなかつたというほど。怒氣を纏っているのに、全くの無表情でそのくせ目が氷より冷ややかで。

大魔王が降臨なさつた！！

その時、クラスメイト一同の心が完全に一致した。急に静かになつたクラスを除きに来た普通の生徒や教師たちすら凍りついていた位で、誰も銃刀法違反だと口にできる雰囲気ではなかつたと、とある教師が青くなりながら言つていた。さらにいえば、少しでも気付かれたら巻き込まれ、身動きしただけでも斬られるんじゃないかという位に殺氣が溢れだしていたとも。

「お前ら、ちょっとそこに正座しろ」

大魔王様の、何かを押し殺したような声はさらなる恐怖を呼び、教室内にいたクラスメイトの他に、廊下から覗き込んでいた生徒や教師たちも思わず正座し、中には土下座して泣きながら許しを乞う者まで現れた。

以来、問題は激減し、問題児達も良い生徒となつた。それに、もし問題が起きたとしても彼が表情を消しただけで万事解決。もしくは学校総動員で問題の後始末に乗り出す。某復活漫画の某風紀委員長よりも恐れられたとのことだ。

ちなみに、彼が正座した者達に何をしたかは不明であり、聞こうとしても体験者たちは顔を青くすると氣絶するなどして

しまつので、大きな謎となつてゐる。

じつあんず正座な（後書き）

あいも変わらず残念クオリティ。またに黙文。浮かんだからやつた公開してるのでスッキリした。  
珍しくペース早めだけど氣のせい。ここまで読んでくれてありがとうございました。

## また、（前書き）

死ネタ第三弾。現在書き溜めたやつをひょっと手直ししてるのでやつぱり駄文。更新速度がカタツムリからネズミにレベルアップ。でもまた滞ります。  
血口満足分ですがよろしければどうぞ。

また、

誰にも言つていらない僕の秘密。実は、僕は原因不明の不治の死の病にかかっている。それは、最初は若干だるいなどと気が付きにくいものだが、その内喀血や激痛等の症状が出てくる。そして、その激痛が無くなつたら死が目前に迫つてゐる証拠だ。

この病は、どうしてかは謎だが手の甲に紅い花のような模様が浮かんでくることから『紅華病』と呼ばれている。

僕が紅華病になつてゐるという事を知つてゐるのは、僕と知り合いの闇医者だけだ。その闇医者の事は僕しか知らない。

…まあ、昔ちょっとヤンチャした時に知り合つた奴だけど、結構信頼出来る奴だつたから今でも交流を続けてるんだけどね。意外と人がいいから、俺の決意を聞いたとき顔をしかめてた。

「この病にかかつた人は本当に少ないし、私もはじめてのことだからほぼ手探り状態だ。だが、おそらくお前のその作戦は実行できまい。…だから、大人しく看取られればいいのに」

「お前にはまだ看取つてくれる人間がいるんだ。この贅沢者め」

それにしても、今まで散々色々やつてきて裏じゃちょっとは名の知れたこの僕の終わりが、こんなに呆氣ないなんて笑えてくる。

今さら死は怖くないけど、少し寂しい。漸く普通の生活にも慣れてい、そんで笑顔で『また明日!』なんて当たり前のように何気ない約束を出来るようになった。漸く笑顔で約束とかできるようになつたんだけどな。

皆との笑顔の約束の破り方を知つていたら、なんて思う事もあるけど、やっぱり知りたくなかったりするんだ。だって、最後の瞬間暖かいモノ抱いていたいし。

僕が死ぬつてことを皆に教えていいないのは、最後は一人で迎えた  
いから。まあ、それは最後だからつて色々口走りそうだだからなんだ  
けどね。それだけは阻止したい。恥ずかしいから。

昔の自分からは想像もできない程穏やかな僕は、最後は猫のように姿を消そうと思っている。死んだあと大泣きしそうな奴に何人か心当たりがあるからだ。

姿が無くなってしまった方が死んだなんて思われにくいでしょ？それに、僕昔猫みたいな暮らししてたし、最後に観るのが泣き顔なん

「ヤーベーリー? 朝ヤー?」

一人で死のうと思つたけど、あの闇医者が言つたとおりちょっと無理っぽい。何故なら、眼が覚めたら動けなかつたからだ。理由は簡単。今まで僕を蝕んでいた激痛が無くなつたせいで、酷く身体がだるい身体。起き上がる動作をするだけで全身汗びつしょりだ。母さんが呼んでいるけど、それに返事すらできない。…これだと、持つて一日もないかもしない。

「あはは、ちょっと…体がだるくて動かな…いだけで、別に…大丈  
夫…ですよ」

僕の部屋に入ってきた母さんは、僕の異常に気づいたようだ。でも、命にかかわるものだとは気が付いていないみたいだ。良かつた。まあ、言い訳はすぐに見破られたけど。て言うか、きっと酷い顔色してるんだろうな。母さんが泣きそうな顔してる。そんな顔させたい訳じゃないんだけどな。

「ちょっとどどごろじやないでしょー今日は学校休みなさい」「いえ、遅刻で良いんで行きます。…約束したから」

母さんが心配してくれてるのは分かる。でも、

別 今日僕は最後の約束を果たす  
顔は真っ青で脂汗だつてかいているといふのに、表情だけはいつ

もの笑顔。それはきっと不自然だと分かっているけど、僕にとつて他人を安心させる方法は笑顔しかないんだ。

どうしても引く様子の無い僕を見て、母さんは渋々と言つた感じで了承してくれた。その代わり、学校まで車で送つていくと言つてくれた。それは今の僕にとつてかなりありがたい申し出だった。

学校に着くと、ふらつきながらも自力で教室までたどり着いた。ドアを開けた途端、先生が僕の顔色を見て「帰れ」と言つてたけど、無視して席に着く。今日は一日中教室授業だったから、多分大丈夫。南田や西富とかが心配してくれたけど、それに答えて行くのもちよつと大変。流石にヤバいかもしない。これじゃ、こつそり猫の様に消えるなんて無理か。でも、出来るだけいつも通りで居よう。最後だからつて特別にしたくない。

何とか5時限目まで耐えたけど、それまでが限界だつた。五時限目が終わると同時に、僕は倒れた。そして、気付いたら僕は自分のベッドで寝ていて、その枕元には父さんと母さん、それと学校の友達と先生が居た。

ただ、若干視界が不明瞭なせいで表情がぼやけている。ちょっと残念だけど、大体は気配で分かる。なにせ昔色々やってたから気配には敏感なんだよね。しかも今ほとんど目が見えてないから、その分他が鋭くなっているみたい。

担任の鳥羽先生と父さんと東野先輩と南田が怒つていて、母さんと西富が泣いていた。

「…どうしてそんな弱つていたのに学校へ来たんだ…」

先生のメッチャ怒りを抑えた声、でもその程度じゃ僕は怯まない。どうせもう駄目だと吹っ切れたからばらしまくつて先生泣かせてやる。

「別れを言つたのですよ。僕はあの後姿を消すつもりでしたから」その言葉に、驚きの声が上がつたけど、先生はそれを黙らせた。ちょっと怖い。いつも怖いけど、今はいつも以上に怖い。ふと、噴

火直前の火山つてこんな感じのかなって思った。

「どうして姿を消そうとしたんだ？それはお前の手の甲にある紅い花みたいな模様と何か関係があるのか？」

きつく包帯を巻いて隠してたのに、なんでばらしたんだといつ田を向けると、母さんが申し訳なさそうにした。きっと怪我の手当てをしようとして、バレテしまったんだろう。

「はい。むしろ、それが原因ですね。先生は知っていますか？『紅華病』」

「イヤ、知らない。が、それがどうした」

「紅華病は、原因不明の不治の病です。そして、僕はそれにかかります。持つてあと一日位だと思います。あ、大丈夫ですよ？ これは感染りません」

淡淡と話す僕。でも、周りの皆はその事実を受け止めきれないみたいだ。いや、受け止めたくないのかもしれない。でも、僕は話しが続ける。たとえ不治の死に至る病だとしても、この病は最後まで僕の言葉を奪わないでいてくれるから、心置きなく話すことができる。それだけは感謝した。

「僕は、自分の死に際を見られたくなかったので、姿を消そうとしていました。僕は猫と同じですから。今日無理して学校に行つたのは、僕が初めて笑顔で出来た約束を果たしに行こうと思つたからです」

「初めての約束…？」

「そうですよ、東野先輩。きっと何気なく言われるものだから誰も気にしていらないかもしない、本当に些細なこと」

「『また明日』ただ次の日も会おうって言つて、至極当たり前の約束です」

「そんな事の為に無理してまで来るんじゃねー……お前が倒れた時、どんなに怖かった分かつてんのか…！」

少し泣きそうな声で言つ南田には一寸罪悪感。でも、そんな事なんかではない。僕にとって一番光をくれた様なコトバだからだ。

「今日は、皆に『また明日』の代わりに『サヨナラ』を言おうと思つていたんです。でも、ここに居る人だけに特別なサヨナラをあげます」

もひ、本当に時間が無いから、最後の力を使ってとびきりのサプライズしてあげよう。冷や汗が止まらないし、意識も朦朧としてるけど。伝えて見せる。だからどうか、もう少しだけ。

「父さん、若干頼りないとか思つてたけど、ひょろりとしているのに大きな手でなでてくれるの、実は安心できて好きだつた。これからは、お母さんと笑つて僕の分まで長生きして」

父さんは、さつきまで怒つていたのがウソのように、静かに涙を流した。もともと口数の少ない人だつたけど、その分気配でモノを言つから、父さんの気持ちが痛いほど伝わってきてビリビリする。

「母さん、偶に口うるさいとか言つていたけど、こんな僕にこんな暖かな居場所をくれて本当にありがとう。これからは、父さんと支え合つて、僕の分まで笑顔でいて」

母さんは涙を流しながら笑顔で父さんに寄りかかった。たぶん、悲しそうだけどとも優しい笑顔を浮かべてくれるんだろう。母さんつて強いから。それが見えないのが、すこく残念だ。

「鳥羽先生、いつも口うるさいつて色々悪口言つて『ゴメンなさい。でも、先生に褒められるのは意外と好きでした。先生は、生徒に笑顔を与える人のまでいて』

「言われるまでもない」

でも、そう言つた先生の目には光るものが見えた気がした。ちょっと成功した気分。だってほとんど感情を表現してくれない人だから。今日がほとんど見えないのが凄く残念だなーって思った。

「先輩、先輩はいつも僕をあきれさせたけど意外と頼りがいがある、僕にとつて頼れる兄のような存在でした。社会に出ても、先輩は自分の信念を曲げないで生きて」

「桜のくせに生意氣だぞ。言われなくても俺は俺らしく生きてやるよ」

先輩は泣きながら笑顔で言つてくれた。いつも見させてくれてた、頼もしいお日様みたいな笑顔だったんだろうな。ちょっと鼻声だつたけど。ホント、先輩が兄さんだつたら良かつたのに。

「西宮、キミは僕にとつて唯一の女友達で、いろいろと相談出来た。同じ年なのに、僕にとつてはお姉さんのような気がしてた。キミはその優しい強さを失わないように生きて」

「…………うん……分かった……」

嗚咽交じりに返事をくれた西宮は、それでも取り乱してはいなかつた。しっかり者で、だけちょっと甘えん坊だつて知つてた。母さんと同じで、僕が甘えると嬉しそうにしてたよね。だから思わず甘えすぎた気がする。

「南田、お前はいつも乱暴で、一番良く喧嘩した。でも、お前は僕にとつて背中を預けるに値する奴だつたよ。お前はその熱い心を忘れずに生きて」

「……当たり前だ!!」

俯いていて良く見えなかつたけど、泣いているのは分かつた。鼻をすする音が聞こえたし、何よりこいつは意外と涙もらい。不良ぶつてるけど、ホントはただ情に厚くて口より先に手が出ちゃうそんな奴。一番気を許した相手だ。こいつと喧嘩してる時が一番楽しかつた。たぶん、お前が僕の初恋…なんて言つてやらないけど。

「最後に、僕は皆に会えてよかったです。はじめて言えた約束はもう果たせないけど、意外と満ち足りた気分だ。皆、サヨナラ、ありがとう」

最後の方はちよつとかすれちゃつたけど、ちやんと聞こえただろ  
うか。でも、そろそろこの眠気にはらがひのむ無理つぽいから眠つ  
てしまおひ。

でも、我ながら暖かな終わりだったと思つ。最後に思わず素の笑顔になつてしまつ位に。ああ、幸せだつた。閻魔様に会えたら、僕はとても幸せでしたつて胸を張つて言える位に。

「…けど、お前がいなきや面白くねーんだよ…バカ桜…つ」

「言いたい事だけ言つて逝つたらどうなんですかね……桜ちゃん」

桜が静かに息を引き取った。その瞬間、桜に一番近い所にいた二人は泣き崩れた。西宮は呼吸さえままならないかのように号泣し、南田は歯を食いしばつて静かに涙を流してた。

それを皮切りに、桜の部屋に嗚咽と涙が溢れた。

桜のお母さんが泣き崩れ、桜のお父さんはそんなお母さんを抱きしめたまま泣いていた。自分の涙をぬぐいもせず、自分の服が濡れる事を厭わず、まるで涙腺が決壊したかのように泣いてた。

「……ハカラ……サミカラだ、高嶺……」  
先生は声を出さずにただただ涙を流していた。そして、先生はその涙をぬぐうことなく立っていた。歯を食いしばって、白くなるま

で握りしめられたその拳が、先生の表に出しきれない程の感情を表してゐみたいだった。

そして氣付いたら、俺も子供のように声をあげて泣いていた。普段だったら、男だし、いい年になつてみつともないつて思うけど、今は。今だけは、別れを惜しむ涙を流させてほしい。みつともなくても良いから。

「好き勝手言つて、勝手に逝くなよ桜…。そんな顔されたら怒るこ怒れないだろ…？」

息を引き取つた桜は、今まで見た事もないほどに穏やかで、幸せそうな笑顔だつた。それがなおのこと、俺達の胸を締め付けて涙を流させる。

ホント、最後までズルイやつ。

待つてゐる。輪廻転生とかいうのがあるのを信じて、お前にまた会える時を。きっと律儀なお前のことだ。また俺たちのそばに、お前の両親の子供として生まれてくるんだろう？

だから、今はさよなら。

またいつか、お前と笑い逢える口がくることを祈つてゐる。

### また、（後書き）

また明日つて、考えてみればちょっと話できるかな？の結果がこれです。うまく表現できないのがもどかしい。

とりあえず、ここまで見ててくれた人へ。ありがとうございました。

## 養子の適正試験（前書き）

シリアルスッぽーのが連発してたので、じりりりで笑いを。でも黙文です。よろしくねばびつ。

## 養子の適正試験

「ナニコレ…」

「珍百景だよきっとそれでなければこんな事ありえない

「だよねえ…！…てか冷静に現実逃避しないでくれえ…！」

今俺と浩樹は爆撃されます。アニメとかでよく見るバズーカとか銃火器とかで。必死になつて避けてるうちに、双子の弟である浩樹は足をくじいた。今は俺の背中の上で現実逃避してて、俺は弟を背負いながら避けてるんだよね。俺達こんな事される覚えないんだけど。この時ばかりは何故か無駄に高い身体能力に感謝した。

「俺はこんな事される覚えないんだけどお…！…浩樹は知つてる…？」「イヤない。全くこれっぽちも無いよつん」

両親が死んで、それ以来兄弟力を合わせて一人だけで生活して来た。今まで裏の方に足を突っ込んだ覚えは無いし、お金だって中学に許可をとつて真っ当なアルバイトで稼いだものだけだ。

いたずらや悪ふざけも、やつた後はちゃんとけじめをつけた。うん。俺らの何処にも原因は無いよ。ただ、流石に同体格の浩樹背負つたまま避け続けるなんて勘定、特に鍛えてもいない僕が続けられるはずも無く。

「あ、ヤバい…足ちょっと限界っぽいかも…」

「昌樹い…！…？」

せめて弟だけでも逃がそうと思い、全力で交番があると思われる

方向に空高く放り投げた。ただ逃がそうとすれば反抗するのが長年の付き合いで分かつてはいるから、助けを呼ぶように叫ぶ。

浩樹は身のこなしが軽いから、無事に屋根の上に着地し、そのまま猫のように走り去つていった。

黒服のバズーカを持つた男たちは、浩樹の事を追わずに僕だけを狙つてはいる。ラッキーではあるけど、謎だ。もしかして、これは俺個人に対する何かか? どつちにしろが危ないって事に変わりはないか。

しばらく避け続けていると、いきなり爆撃が終わった。すでにボロボロな僕だけど、何とか致命傷になる事は避けた。今の俺は生まれたての小鹿状態だ。軽いでコピン一つで倒れるかもしれない。

いきなり黒服の男たちが整列したと思つたら、その後ろの方から白いスーツを着た人が現れて、僕に向かって拍手をしながらにこやかに言った。

「桜宮昌樹君、おめでとう」

「すみません何があめでとうなんですかいきなり人を爆撃したくせにもしかして僕もう死んでいるとか言うオチですか」

思わずノンブレスで言いきつた僕に、その白い人は驚いた顔をした後に申し訳なさそうな表情をした。

「ごめんね? だつて適性検査しなきや受け入れてくれないつて部下たちが暴動起こすんだもん。後ちゃんとキミは生きてるから。ここ現実だから」

「適性検査! ? なんの! ?」

「僕の養子になるための適性検査」

「よ、養子い! ?」

なんで養子になるために適性検査が必要なのってか爆撃される事が何故に養子の適性検査に必要なのかと僕の頭は大パニックだ。あれか？頑丈とか機転とか？

「突然の事で驚いてるかもしないけど、僕と君って一応血つながつてるんだよね」

「どうやら彼は母さんの弟さんで草凪蒼志郎と言つらしき。そして、とある有名グループの社長さんで、結婚はしたくないけど子供は欲しいので、養子として僕と浩樹どちらも引き取る事にしたらしい。でも、その会社には裏の顔があつて、そつちを任せられるのはどうちか試す…それが今回の適性試験だそうだ。」

「これからは義父さんと呼んでね」

語尾に星でも付けたんじやないかと疑いたくなるような、やけにはしゃいでるのは明らかに年齢より若い外見の叔父さんで、恐らくボス的な位置にいる人を目の前に、俺は思わず現実逃避したくなつた。

「挨拶、あの世に行つてしまつた両親へ。俺はどうやらヤのつく自由業の次代にされてしまつようです。弟は普通の社会人になれますが。」

「こうして、新しい環境での生活が始また。…いろんな意味でとてもヤだけどね。」

## 養子の適正試験（後書き）

続きをついては反応次第で書きたいと思います。ストックにはこれまでの続き書いてないけど。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

## おおづま、ここにおひたー（前書き）

勇者「りじくない」女勇者に魔王がほれたら面白こだわつなど思つて書いてみた。

駄文だけじ書いて結構楽しかつたです。よろしかつたらどうぞ。

まおうは、ここにおちた！

#### side・勇者

代々続く勇者と魔王の戦いに、最近変化が現れ出した。大抵事の発端は大国の姫様が魔王にさらわれる事なのだが、いい加減誘拐対策をしても良いと勇者クラウンは思っている。

大体おかしいんだよ。前の姫様が魔王に連れ去られたんだつたら、もう少し警戒しても良いと思うんだけど、警備レベルは昔から全く変わらないらしい。正直それ聞いた時はあまりのバカさ加減に呆れてものが言えなかつたよ。

それと王様の勇者の選び方にも驚きだつたよ。家系じゃなかつたんだね勇者つて。てか各地の闘技場で一番強くて見た目が良い奴を選んで、そんで試験みたいなのを受けさせて学力を図つて、最後は王様の直感で選ばれる。バカだと思つ。

しかも、拒否権は全くないから私にとつてかなり迷惑だ。ただ闘技場で荒稼ぎしてたらあつという間に勇者様だよ。乾いた笑いしか出でこない。

仲間は誰でも良いけど6人までつて決まつてるし、勇者に選ばれたら適当に金を渡して、その後は一切関わろうとしないし、その癖無事に魔王を倒して姫を連れ帰つたら姫様の婚約者にしてやると言われた。嬉しくねーよそんなもん。これでも私女だし、ソッチの趣味ないし。見た目で選ぶなつてーの。

でも断れないから、仕方ないからここ 魔王城までやつてきてしまった。仲間は皆気心の知れた傭兵仲間三人だけ。金は払つてゐるけど。

「どうする？ここで帰つても良いやつて言つたが、魔王戦になつてから逃げられるとなんかヤだし？こんなところで死ぬのは僕一人で十分だし。でもまあ、死んでやる気は全くないけどね」

そう言つと、案の定三人とも帰つていつた。薄情なのではない。これは勝ち目のない闘いには手を出そとしない傭兵の生き方だからだ。むしろ私の方が異常なんだ。

「俺達は逃げるが、お前はやはり行くのか？ここで死んだ事にして逃げる事も可能だろ」

僕達の中で一番年上の傭兵の先輩が心配して言つてくれたけど今  
の私には無理だ。

「無駄ですよ先輩。私は選ばれた時からこの空想みたいで呪いのような使命から逃れる術は無いんです。それに、私が傭兵になつた経緯…先輩は知つてるでしょ？」

「ああ、お前はただ強い奴と戦いたいんだよな。…だつたら止めて  
も無駄だな。精々頑張れや」

「言われるまでも無い」

他の一人は不思議そうな顔をして僕達のやり取りを見ていたけど、  
私と先輩は挨拶をした後、私は一人で魔王城へと足を踏み出した。

この先私を待つていいのは、生きて理不尽な目に会つか死ぬかの一  
択しかない。まあ、死ぬ気はさらさらないし姫の婚約者なんてまつ  
ぴらりめんだ。

## S A I D 魔王

「私を早く解放しなさい……」

鳥籠のような檻の中で叫ぶ姫に、正直溜息が絶えない。確かに姫  
は美人の部類に入るだろうが、高飛車な口調と高慢な性格のせいで  
マイナスだ。むしろ伝統とかじやなかつたら絶対手え出したくない  
タイプだ。

それにしても、勇者も哀れだ。こんな高飛車女助ける為に命がけ  
な事しなきやいけないし、負けたら死、勝つたら高飛車女の婚約者  
にされちまうんだもんなー。俺の方は死んだふりとかでごまかせる  
けど、勇者は誤魔化せないもんな。まあ、同情したといひで何もす  
るつもりないけど。

扉が静かに開けられ、そこから勇者が現れた。……てか、勇者で合  
てるよね、このタイミングで来るのは勇者しか居ないし。

俺が疑つてしまつたのも仕方ないとと思う。だつて、普通勇者と言  
つたら白とかを基調にした明るい色合いの服を着て、ついでにピカ  
ピカの鎧とか身につけて、そんで聖剣とかもつてるイメージあるじ  
やん。

けど、目の前の奴は違つた。服装は黒づくめだし、鎧は使い古し  
た感じだし、青い輝きを放つ剣（あれつて魔剣だよな）を持つてい  
た。正直、一瞬闇が人の形をとつて現れたのかと思った。どつちか  
つて言うと勇者じや無くて魔王とかつて方があつてる気がする。て  
か勇者らしさが欠片も無い。とりあえず、気を取り直してセリフを

口にした。

「よく来たな勇者よおーー？」

そして、俺の口上を遮つていきなり鞆を投げつけてきた。なんちゅうやつちや。人の話はちゃんと最後まで聞きましょうつて母ちやんに教えられなかつたのか、口う。

「いきなり何すんだよー普通口上述べてからバトルだりーー？」

「そんなんめんどうかい事知るか。私はアンタと戦いたいだけなんだから」

そう言つた勇者はようやく俺に顔を見せた。そして、その顔を見た瞬間、俺の頭の中で鐘が鳴つた。‥メッシュストライク。

身体は猫のように引き締まつて、それでいて出る所はそれなりに出てる。今までうつむきがちで分からなかつたけど、色白の整つた顔立ちよりが、強い意志を感じさせる輝きを秘めた黒曜石のような瞳が、俺を捕らえる。正直、ゾクリとする。

何か側近たちが「あれヤバイですよーー」「勇者違うじゃんーー！あれただの狂戦士にしか見えないんですけどーー」とか騒いでたけど、無視した。

「なあ、お前は何で鬪うんだ？姫を取り戻すためか？それとも世界を救うためか？」

俺が思わず口に出した問いに、勇者はキョトンとした後呆れたようになつた。

「囚われの姫を救うとか、世界を救うとかそんな事どうだつていいんだ。私はただ、強い奴と戦いたいだけだ」

それに、私に拒絶権は無いしねと言つた勇者を、俺は思わず抱きしめて叫んでいた。どうやつたかって？そんなの愛の力でに決つてるだろ！――

「勇者……お前に惚れた！！結婚してくれ……」

「「はああーっ」」

「お前の顔も雰囲気もサイズも何もかもドストライクつてか俺お前に運命感じたつてか一目惚れした！！」

「何を言つてんの……さつきまでのシリアス何処に落としてきたのやー？」

「と云うより貴方ホントに魔王がどうか怪しくなつてますわよ！？」

？」

「いいのそんなの恋に関係ないからーあ、姫は責任もつて城に送り返すから安心して勇者はここにいて！――むしろ俺と一緒にここに永住してよ勇者……てか勇者の名前教えてくれ俺はカルマってんだ！」

手下の魔物に姫を無事に城まで送るよつて指示を出し、あの手この手で抜け出そうとしている勇者を抑える。抱きしめてみると良くな

分かるんだけど、こいつ女なのに適度に筋肉ついてるし見た目よ  
かなり強い。多分、俺じゃなかつたら今頃腕千切れてるかも…。

「離せ！私を離せ！でないと私が闘えないじゃないか…！」

「ヤダよ。だってお前抱き心地良いし、離したらお前絶対攻撃し  
てくれるだろー」

「当たり前だ。私は闘いたいからここのへ来たんだ」

闘う事こそ己の存在意義とでも言わんばかりに闘志をむき出しつ  
して。凄い痛い。これぞ命がけの  
恋つて奴か？…洒落にならねえ。けど、この恋にだつたらこの命、  
賭けたつて後悔はしない。

「俺はお前と恋したってか結婚したいんだ…でも、名前教えて  
くれたら闘つてやるよ」

「私はクラウンだ」

即答したから、仕方なく離してやる。すると、クラウンは足を一  
閃させてきた。顔が赤いから、多分  
照れ隠しだ。可愛い。例えそれが、普通だつたら首がちぎれ飛んで  
る威力だとしても気にしない。断固照れ隠しだと言い張る。思わず  
顔がニヤける。

「この魔王、MじやなくてUです。一応。

「私をからかつて何が楽しい…！」

「イヤ？ けビメツチャカワイイ」

「なつ……」

俺の言葉にさらに顔を赤くする。じつやらストレートな愛情表現に慣れないのか、先程までの刺すような殺氣は無く、戸惑つて怯えてる猫の様な感じだ。まさに子猫ちゃん。

今まで女の子を何人も惚れさせた事はあるけど、それは遊びだった。つまり、これが初恋になる。

「勝負は簡単。クラウンが俺に惚れるか、俺が死ぬかだ」

覚悟しろよ？ 俺の可愛い勇者様。必ずお前を俺に惚れさせてみせる。

その瞬間、勇者は今まで感じた事のない悪寒とともに何か危険を感じたそうです。

おおひま、じこを始めたー。（後書き）

ほんと黙文。でも血口満足だから貰はしないで貰った。  
じこまで読んでくれてありがとうございました！！

## モブ視点 ～とある主従のバトル～（前書き）

いやこう、モブ視点って好きなんですね。

## モブ視点 ～とある主従のバトル～

俺達の平凡な高校生活は、ある日突然爆音と共に粉々に粉砕された。俺達はいつも通りに古文の授業を受けていた。確かに、睡魔が大群で押し寄せてくることに辟易していたのは事実だけど、だからつてこれは無いぜ神様。

五時限目の古文だつたため、居眠りしている奴も多かつたけど（俺も含め）、そのある意味平和な時間は突然やつてきたテロリストたちによって崩された。そいつらは、黒のライダースーツを着込み、黒のフルフェイスのヘルメットやボディアーマーなどで統一しているのだが、七人全員が屈強そうな体つきをしているのが分かつた。

寝ぼけてボケかまそそうとしてる連中は、周りが必死になつて止めた。むしろ夢だつたらどんなに良かつたか…。寝起きにこんなのが見たらまだ夢の中だつて普通は思つよな。うん。

しかも…そいつらは銃とかで武装しているもんだから、どんなに頑張つても一学生である俺達に勝ち目はない。

「我々は闇の使者とでも名乗つておく。我々の目的は不当な扱いを受ける同胞たちの解放と汚職で嘆く人々を救つ事だ。反抗しようとなければ危害を加えるつもりはない」

リーダー格らしき人物がそう言つたから、俺達は女子を内側にして教室の隅に固まる事にした。いくら危害を加えないとは言え、逆上してうつかりとかやられたら嫌だからだ。それに、今どき珍しく

『女は護るべし』つて武士みたいな考え方を持つてる奴が多いし。

しかし、そんな緊張した空気をすり鉢でゴリゴリやつてくれちゃつてる勇者が居た。

「何言つてんだクソガキども。バカなことばっか言つて俺の眠りを妨げるなんぞ万死に値するぞ」

「え、それつて俺達の事? 俺達今の所ろくに発言した覚えないんですけど」

「違えよ。そこの真つ黒黒助どもだ」

誰か叫ばなかつた俺達を誓めてほしい。だつて、さつきから乱暴な口を聞いているのはクラスでも目立たない方の男子だつたはず。それが武装した強そうな男七人相手にクソガキ発言。心臓に悪い上に今までのシリアスっぽい雰囲気が霧散している。

俺達がそいつ、隠明寺八房の言動に内心大絶叫しているのも知つてか知らずか、本人はポンポンと爆弾発言を全力投球している。

「大体大の大人が七人そろつて闇の使者とか名乗つてる時点でかなりイタイんだけど。もしかして精神年齢中一の夏で止まつてるんじゃない?」

やーめーーーー! そろそろテロリストの方々プルプルしながら武器握りしめてるからー そろそろキレそうなフラグバリ3で立ちまくりだからー!

そんな俺達の心の叫びを代弁するかのように、一人の女子が隠明

寺の所にかけて行つた。普通こゝは引き留めるべきだつたんだが、けど、皆呆けてたから反応が送れた。

「すみませんコイツ寝ぼけてるんです！今起こして謝らせますから待つて下せーーー！」

もう言つてテロリストの前に立つたのは、隠明寺の幼馴染で主だという土御門明美だ。どうやら本当に寝ぼけていたらしく、彼女が田の前に立つても無反応つーか船漕いでる隠明寺。そして土御門はそう言つなり隠明寺の胸倉を掴んで平手打ちを验りわせてくる。

バシ、ビシ、…びびびびびびびびびび…！

最初は普通の平手打ちだつたはずなのに、今じゃ音が連なつて。往復、ビンタの最速記録でギネスに乗るんじゃないかつてくらいの速度でのビンタは、見てるこっちの方が痛くなつて来る位だ。むしろクラスの数人が自分のほっぷに手え当てて痛そうに見てる。流石に闇の使者のみなさんも制止をかけた位だ。

「ちょつ、お嬢さん落ち着いてー我々に対するその坊主の言葉は確かに頭に来たが、お嬢さんの速度で平手食らわせていたら逆にこっちが痛いからーもう良こからやめたげーーー！」

そして土御門による痛い田ざましゴールは終わりを告げた。どうやら男の言葉によつてやめたのでは無く、ただ単に隠明寺が田を覚ましたからだ。

「八房、眼は覚めた？」

「おー、三日は起きてられる位ばつただ

…普通、音が連なるほどの速度でたたかれたらヘタしたら首が折れるんじゃないかと思うんだけど、やられた本人は頬を少し紅くしているだけで全く効いてないようだった。

「じゃあ、なんであんな暴言言つたか説明してくれる?」

確かに、それは俺達も聞きたい。どうやらそれは闇の使者の人達も同じだつたらしく、先を促してた。しかし、俺達は失念していた。奴が歯に衣着せぬ性格である事を。

「ああ、クソガキ呼ばわりの事? そのまんまだよ。良い大人が自分の要求が通らなかつたからつて自分より弱い、本来ならば護るべき存在を盾にごり押ししようとしてる。しかも、どう見ても護る対象に向けるべきものではないものを振りかざして。そんなのただ泣きわめくガキと何もかわりやしない。むしろまだ普通のガキの方が楽さね」

「…貴様は我々の崇高なる使命をバカにすると言つのか?」

「バカにしてんのはアンタらの人間性。いい加減目を覚ませクソガキどもが」

「まあ、確かにアンタの言つ事には一理あるわ。あたしも年をとつただけの人間を無条件に敬えるほどできてないしー」

「俺も。年を食つただけの奴を大人とは認めない。マジガキなら更生の余地はあるけど、こんだけ年を重ねちゃ難しい物が有るさね」

…正直、ちよつとすつきりした。けど、そもそも言つてられない。言われ放題の闇の使者の方々は今や錆びた鎖に繋がれた猛犬と同じ氣配を漂わせているからだ。

「さて、オイタが過ぎたガキにやそろそろお仕置きの時間だ」

瞬間、隠明寺が纏う空氣が変わる。電信して、教室中の空氣は隠明寺と同化し、辺り一帯に一陣の風が吹いたような気がした。

隠明寺は、そう言うなり霞むような勢いで近くに居た闇の使者の一人を殴り飛ばした。三メートルくらい吹っ飛ぶのを俺達は茫然と見ていた。

アレ？ 人間つてあんな簡単に吹っ飛ぶもんだっけ？ てかお前そんな強かつたのかよ。

「確かにテメエらの崇高なる使命とやらには少し贊同しない事もない。だがな、こんな卑怯な手使つてまでやり遂げるにはちと軽いんじゃないかい？ それに、俺はこいつらの事が気に入ってるんでね。傷つけられたくないのさ」

正直かなりカツコイイと思つた。ただ力が強いんじゃない。彼は心も、魂も強いのだ。俺達を背に、何も恐れるものは無いと言つているようなそのしゃんと伸びた立ち姿は、見る者を引き付けて離さない不可視のヒカリを放つているようだつた。

ただ、隠明寺のカツコよさと、現在の非日常に当たられて腐女子

（腐男子もか）が換氣するようなセリフを口走つたやつが数人いたので、ひっぱたいて呼び戻したのは蛇足か。

「良く言つた！それでこそあたしの下僕よ！」

いつの間にか隱明寺のすぐ後ろに立つていた土御門は、何処から出したかわからない巨大な鉄ハリセンを手に不遜に言い放つた。

彼女も、まるで戦場にその名を轟かす常勝不敗の女将軍のように堂々と立つていた。むしろ背後に『傲岸不遜』の文字がドーンと見えた気がした。

「誰が下僕だ…。まあいいや。とりあえず殺つちゃうとするか」

そのやる気のなさそうな言葉を皮切りに、暴風のよだれで隱明寺は圧倒的な力の差を見せつけていた。

暴風のよだれに荒々しいその動きはどこか洗練されているよだれにも見え、そして、時折飛んでくるのを土御門が鉄ハリセンで容赦なく吹き飛ばす。一人の息はぴつたりだ。

闇の使者は他にもいたらしく、最終的には三十人位襲いかかってきたが二人はかなりあさりと倒してしまつた。喧嘩慣れしてるのでの勢いではない。もはや次元が違うと思わせる位だ。二人には、手加減と言う言葉はあつても容赦と言つ言葉は無いのではないかと思わせるほどだった。きっと鬼神の如き鬭いぶりとはこのことを指すんだろ？と思つた。

辺り着いた警察が見たのは、一度窓を割つて外の池に落ちて行く闇の使者の姿だったらしい。もつとも、その頃には俺達も隱明寺と

一緒になつて暴れていたけどな。

## モノ視点 ～とある主従のバトル～（後書き）

非日常による通常の崩壊って結構好きだったけど、書くのは難しかった。

ここまで読んでくれてありがとうございました。

かみあひづかひてだれか。 (前書き)

性転換ネタがやりたかった。後悔はしていない。相変わらず駄文  
しかも短い。それでもよろしければどうぞ。

朝いつものように学校に行くと、いつも俺より先に来ている女子が居る。いつもそいつは一番乗りで読書をしている。それで俺は一番乗りだ。そう、いつもなり。

今日は違った。読書をしているのも長い髪を縛っているのもいつも通りだ。しかし、制服がスカートではなくスラックス…と言つたり、男子の制服を着ていた。体格だつて男のそれだつたし。

「…こつまでじろじろ見ている気だ？」

「おまえ、男装趣味が「ある訳ねーだろボケ」…つ？」

そう言われて思わず固まってしまった俺は普通だと思つ。彼女は確かに昨日まで女子だつたはずだ。若干セクハラになるかもしれないが、昨日までは確かに控えめにだけど胸もあつたし。でも今は明らかにただの胸板だ。固まってしまった俺が気になったのか、彼女は席を立つて俺の前に立つて手を振つていた。

昨日までは若干俺の方が高かつたのに、今じゃ少し負けている。  
…結構悔しい。ほんとはそれどころじゃないんだけど、混乱中といふことで大目に見て欲しい。

「大丈夫か～。もしかしてショックで彼岸までぶつ飛んじまつたか？」

「いやいやいや、おかしいよね。明らかにおかしいよね…！」

「それは俺も切実なまでに感じている感情だ。物語で読むと笑えるけど実際起きてみると笑えないもんなのな」

「いや、そこを笑い飛ばそうとしている君はかなり逞しいよ……」

彼女の話によると、確かに昨日寝るまでは女の体だったそうだ。しかし、今朝起きてトイレにいくと、ついていないはずの物がぶら下がっている事に気が付き驚いたらし。（せめてもう少し恥じらつてほしかった…）そして、閉じこもる訳にもいかないので弁当を作り、朝ごはんの用意もして、制服に着替えようとしたら女子の制服以外にちゃんと男子の制服も用意されていてらしい。本人は、サイズがちょうど自分好みのサイズだった事に驚いたらし。（俺としてはもう少し別の事に驚くべきだと思う）そして、起き出してください家族が彼女の異変に気付き大絶叫。でもすぐに慣れた家族はそのまま彼女を学校に送り出したとのことだ。

「…ねえ、君のその無駄に高い順応性は遺伝かい？」

「まあ、それもあるだろうけど。俺はその中でもぶつちぎつだぜ？」「…男になった彼女は、とても男前だった。そう言えど、彼女は以前から男顔負けの男勝りだつた。しかし、それが男子の体になつてしまつといひまでカツコ良く感じるのかと驚いた。

「ま、なんでこうなつたかなんてわかんねえし、かといつて戻るまで登校拒否なんてやつてらんねえ。

性別が変わっただけで、それ以外はいたつて健康なんだし」

「それで済ましていい問題じゃないとと思うのは気のせいかな」

「多分それが普通だから気にすんな」

「お前ももう少し気にしろよーーー」

それからは大混乱だつた。いつも女子が座っているはずの席に結構良いガタイした男子が座つてゐるから、クラス間違えたんじゃないのか？いいや私はこここのクラスで間違いないですみたいなやりとりで大混乱。

彼女の友達である土御門も驚いてたし、クラス中が大パニックだ。けど、一足先に情報を知つていた俺は冷静でいらしたし、当の本人はのんきに欠伸している。しかし、流石に気まずかつたらしく、言い訳の様なものを口にした。

「あー、確かに混乱するかもしだれませんが、私自身は何も変わつていません。強いて言うなら、男になつた事により色々と動きが大胆になるかもしだれないですけど」

見事な敬語で話す彼女：香月は、本当に変わつてないという事が伝わってきた。けど、言い訳になつてないよ、それ。むしろ混乱を招いただけだよ。むしろ大胆になるつてなにする気なお前。けれど、そんなツッコミは騒ぎの原因に笑い飛ばされた。

それから香月は大人気だつた。前からフェミニスト的なところはあつたのだが、男になつた事でなんかリミッターがブチギレたらし

く今じゃかなりの紳士だ。そして、男子にはいくらか砕けた口調で、心を許している人間には乱暴だが気の良い感じで接している。

例えば、女の子の荷物はさりげなく持つし、力仕事は率先してやる。誰かが困つてたら当たり前のように助けるし、足をくじいたり、怪我をして動けない奴とか、お姫様抱っこで保健室に運んでたから。ちなみにこれは男女問わず。男でお姫様抱っこされたやつはホント「愁傷さまつてやつだ」。

髪は長いままだし、顔だつてほとんど変わってない。しかし、男のになつた香月はかなり人気者だつた。香月自身も性別は気にしていないようだ。流石に、着替えるときは女子とは別で着替えてる。まあ、男子と一緒に着替えようとしたときは必死になつて止めたけど。

「紳士で力持ちで気配りも上手で、今じゃラブレターだつて貰つてるんでしょ？」

「うん。下駄箱の中にどつさつと。開けた瞬間雪崩を起こすなんて初めての体験だつたよ」

「モテモテだな香月よ」

「男子からも女子からも来ればそんな事言えなくなるよ」

そう言つ香月は若干煤けて見えた。それもそうだろう。女子からも男子からも彼氏になつて下さいやら大胆にも抱いて下さいと書かれたものもあつたり、中にはヤンデレ系の手紙も来てるらしい。そんなんだつたら俺でも悲鳴を上げるだろ？

「てか、ヤンテレ系は血文字とか当たり前だからな」

「『めんリア充爆発』とか思つたけど全然羨ましくなかつた」

暗くなりかけた雰囲気を払しょくするよつこ、話題を変えてみた。

「といひで、なぜ性転換したか原因はつかめたか？」

「こや？ 今ん所さとつぱつだ。…そつぱんば、夢ん中で言こ争つて  
る自称神様とやらを殴り飛ばしたよ  
うな気がするぞ？」

「「…原因、それじやね？」」

「…え、マジ？」

「いや、彼が彼女に戻るのはまだまだ先のよつだ。」

珍しく連投。なんとなく慣れてきた今日このごろ。  
最後まで読んでくれてありがとうございました。

（後書き）

## ファンタジー・ブレイカー（前書き）

男前な人魚つてどうだろう。そして気づいたら出来上がりってた。  
駄文＆短いですがよろしければどうぞ。

## ファンタジー・プレイヤー

それまで僕が持っていた人魚像は、その日を境に木つ端みじんにされた。正確に言うと、人魚に対するイメージだけど。

その日僕は、何故か学校の人達に引きずられるまま海に来ていた。何でも、そこはアウル君（ハーフのイケメンなお金持ちの坊っちゃん。実にハイスペック）の家のプライベートビーチらしく、人影は僕達のしかないし、何よりもとても綺麗だった。

だけど、僕は彼らのいじられ要員であつたため、素直に喜べなかつた。きっと何かあると。そして、予想通り着衣のまま海へ投げ込まれた。制服じゃなかつたのが幸いだつたけど、両手両足を掴まれて、振り子みたく投げられたもんだから結構飛んだ。そして、派手な水しづきと全身に感じた痛みを境に、僕の意識はブラックアウトした。

気がついたら、岩礁の上に仰向けに寝かされていた。そして、僕の頭の近くには美少女と言つても過言ではないくらいきれいな子が居た。しかも、彼女の、本来足であるはずの部分は、魚の尾びれの形をしていた。

「…人魚姫…？」

「んな寝ぼけた事言えるんだつたら大丈夫そうだな」

…あれ？僕さつきの衝撃で耳でもやられちゃつたかな？そうちょっと悩んでると、再び彼女が凜とした綺麗な声で話しかけてきた。

「オイ少年、人が話しかけてるつてのに無視するたあい一度胸だな。  
しかも助けてやつた礼も何もなしかコラ」

……腰のあたりまである艶やかな黒髪、強い光を秘めたアメジストの瞳、すっと通った小ぶりな鼻に小ぶりのピンクの唇。贅肉なんて欠片もないし、胸は貝殻のアレで隠されてるけど結構大きめだ。そんな、理想の女の子そのものみたいな可愛い人魚姫が、とても男らしく見える。言葉づかいも含め。

「……いえちょっと現実って厳しいんだなって再確認してただけです。  
助けてくれてありがとうございます」

「？ そうか。たまには現実から目をそらしたくなったりするよな～」

若干遠い目になりかけながらもきちんとお礼を言つと、何故か同情された。何故だ。

「あ、僕は東雲涼といいます」

「ああ、俺はセレーナだ」

……無駄に高い順応性がこの時は少し恨めしい。とても男らしい口調で話す人魚姫と、普通に自己紹介から世間話までする仲になってしまった。話している内に、彼女とは結構いい友達になれそうな気がした。

「それにしても、人魚って物語の中だけの存在じゃなかつたんですね～。事実は小説よりも奇なり、で  
す」

「ああ、でもあの話はほとんど実話だぞ。俺達人魚は恋愛が大好きだから、その為なら命をかけるのも不思議じゃない位だし。まあ、皆がそうとは限らないけどな」

「セレーナは何となく恋愛よりも身体を動かす事が好きそうだよね~」

「さつすが涼! その通りだぜ。でもなんでわかつたんだ?」

「…誰でも君の言動その他諸々を見ていればすぐわかると思つた」

「それから日没までそこに居て、あまり遅くなるとお互い周りの人間がうるさい」という事で帰る事にした。いつか再び会つ約束をして。

「お前潮に流されて結構遠くまで来てたんだよ。まあ、気絶してたから水も飲んでなかつたし、俺がすぐに助けてやつたから大丈夫なんだけどな」

「結構危ないは足わたつてたんだ、僕。でも、結構遠いなら、僕帰れないかも」

「近くまで送つてやるよ。まあ、さすがにその他大勢に姿を見せるわけにはいかないから、ある程度したら自力で帰つてもらうけど」

「大丈夫。色々と無茶に巻き込まれたせいで地味に遅くなつてゐから」

「お前普段何されてんだよ」

世の中には知らないほうがいいことがたくさんあるんだよ？つて  
にっこり笑つたら、顔青くさせたものすくく頷いてた。やだな、  
僕脅してないよ？

セレーナにビーチの近くまで連れてつてもらつて、そこで別れた。  
ちなみに、道すがら聞いた事実として、姿を見せちゃいけないのは  
禁忌とかじやなくただ単にめんどくさいからということ。夢つて儂  
い。ある程度泳ぐと岸にたどり着いたのでホツとしてたら、僕を海  
に放り込んだ連中が顔中汁まみれにして出迎えてくれた。さすがに  
やりすぎたと思つたらし。

「でもこれ、僕の運が良かつただけだから。普通なら死んでたよ？」

そう言つて笑つたら、しばらくの間皆大人しくなつた。ついでに  
冷や汗ダラダラ。おかしいな。僕はおどしたつもりないんだけど。  
まあ、それ以来やりすぎないよう気を付けてくれるようになつたか  
ら良いんだけど。

だけど、暇を見つけてはセレーナ似合いに行つたけど、何故か会  
えずじまいだつた。もしかして、あれは頭を打ち付けた時に見た幻  
覚か何かだったのかと思つてからには、時間が過ぎていつた。

だけど、それからしばらくして、今度は陸で彼女にあつた。その  
時はちゃんと人間の足が生えていたし、男物だけど最近の服に身を  
包んでいたけど、間違える事は無かつた。

「セレーナ？どうしてここに？」

「あー涼ー！探したんだぞ。テメ工俺が待ってたってのに全然来ねえから、俺がお前を探しにここまで来てやつたってわけさー！」

「とりあえず大声はやめて。そして僕だつて毎日じゃないけど君を探しに行つたんだけど？」

「ありや？行き違ひだつたか？」

「多分そう。あ、この前の御礼、何が良い？」

「とりあえずお前の所に住まわせり」

「良いよー…つてえ？うそなんで？」

「ちよつとこだずりが過ぎて海から追い出されて行く場所がねえ」

久々にあつた彼女は、とても綺麗な笑顔を浮かべているにもかかわらず、とても男らしくずうずうしかつた。幸い、僕は一人暮らしだから何とかなつたけど。

ひつして、僕と人魚の不思議な同居生活は始まつた。そして、ある意味日々夢を破壊されていて、眼から鱗の勢いだ。

「オイ涼ー。座敷わらじつれてきたぞー」

「はじめましてなのですー！とりあえず俺様に跪けですうー！」

「ああ、また夢が…」

「でも楽しんだら」

「否定できなー…」

それでも、彼女が引き連れてくる個性豊かすぎる面々に、苦笑しつつも普通にお茶をすすめる僕もそつとう変わってるんだひつないと思いつつ、楽しいから流されていたこと顛つ今日この頃。

## ファンタジー・プレイヤー（後書き）

この続編はありませんが、要請・妖怪その他もろもろのイメージを壊してみたいと言つリクエストがあつたら、頑張つて書いてみよつとは思つています。

まあ今まで読んでいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3331s/>

---

なんかカオスな短編集

2011年11月12日00時41分発行